市場経済の転換期を生きる中国女性の性別規範：3都市の主婦へのインタビューを通して

鄭　楊
哈爾濱師範大学

Ⅰ　はじめに

「女性には経済的自立がなければ、本当の自立がない」、それは1949年以降の新中国が提示してきた進歩的かつ画一的な性別規範となっている。このような性別規範が短期間かつ広範囲に広まったのは、新中国政府の成立とともに男女平等が基本的な国策の一つとして掲げられてきたことによるものと考えられる。しかも、この国策を実現する具体的な手段として、女性に男性と同等の就業機会と報酬が与えられた。そのため、1950年代から、女性、正確に言えば都市部の女性の就業率や教育水準は男性に近づいた（Tang & Parish 2000; Parish & Busse 2000）。

しかし、計画経済から市場経済に転じる1980年代末から1990年代初頭にかけて、中国の都市部において主婦（housewife）が増加し始めた。長年、女性の自立は経済的自立からだという性別規範を構築してきた中国では、主婦の出現が新しい社会現象となり、そのため多くの議論をよび、現在でも主婦の増加と女性の社会地位の低下との因果関係について議論が収束しないままである。

そこで、本稿は、中国都市部の主婦[1]を研究対象とし、仕事と家庭の間を行き来している女性がどのように、「良妻賢母的役割」と「経済的役割」を遂行しているのか、また、転換期の中国で女性の性別規範がどのように変容しているのかを考察する。さらに、こうした考察によって、異なる階層の女性の間で性別規範が多様化していること、階層によって主婦になることは必ずしも女性の社会地位の低下を意味するわけではないことを指摘する。

Ⅱ　問題の所在

1　中国の主婦とは

主婦（housewife）の概念に対して、中国ではまだ明確な定義がなされていない。民間では、

1　本稿の研究対象である主婦には、専業主婦、兼業主婦、そして、以前専業主婦になった経験があり、現在再就職した主婦という三種類の主婦が含まれている。彼女らが退職したり、兼業主婦になったり、社会に復帰したりすることを選ぶ際に、「経済的役割」と「良妻賢母的役割」が相互に作用して、彼女らの選択に影響を及ぼすと考えられる。よって、より明確に女性の性別規範を分析するために、三種類の主婦を取り上げる。

専業主婦を指して、「全職太太」や「家庭婦女」[2]という二つの異なった呼び方をし、それぞれ羨望と蔑視の意味あいを含んでいる。主婦を対象とする研究がわずかしかない現状でも、新しく出現した主婦に対して賛否両論の意見が示されている。その中で、丁琳琳・馮曇（2005）は「『全職太太』は「新家庭主婦」で、社会の一切の職務を辞退し家庭に入り、『太太』（奥さん）を職業として良妻賢母の役割に専念している」女性と述べる。また、方英（2009）は主婦を「全職太太」と「家庭主婦」という二つの概念に分け、「全職太太」は1990年代の中国に出現した新しい名称であるのに対し、「家庭主婦」は1950～1960年代の毛沢東時代の無職既婚女性への呼称であると述べ、両者が無職で社会に進出していないという共通点を有しているにもかかわらず、時代によって全く異なる女性を表していることを指摘している。さらに、方英は両者がそれぞれ違ったイメージを持たれる原因として、1949年以降、国家の呼びかけに応じず、社会に進出できなかった少数派の女性に対し、社会はマイナスのイメージを植え付けたため、「家庭主婦」の良くないイメージが広がったのに対し、1990年代以降、市場経済の進化により経済的な要素が人々の生活様式に影響を与え、職場から家庭に入った同じく少数派の女性に対し、社会はプラスのイメージを植え付けたため、「全職太太」に裕福でモダンなイメージが広がった、と分析している。

このように、今の中国では、無職の既婚女性に対して、全く異なるイメージが存在し、二つの概念が定義されているのである。

一方、欧米及び日本では、主婦について明確な定義が提示されている。ロパタによると「主婦とは、家庭の運営に必要な作業を自分で行うか、他人を雇って行うかを問わず、その活動に責任を持つ女性」であり、[3] 瀬地山角（1996）は現代日本の主婦の共通性について「夫の稼ぎに経済的に依存し、生産から分離された家事を担う有配偶者女性」と指摘する。もちろん、欧米と日本の主婦も時代によってその特徴は一様ではない。日本を例にすると、主婦が誕生した大正初期、主婦は主に当時の中流家庭に属し、「女中」という名の家事使用人を雇っていたが、戦後はサラリーマン社会になったことによって、主婦は圧倒的多数派となり、家事・育児に専念している。さらに、中国と比較して興味深いことに、現在の日本では、家事・育児に専念するのがよいという価値観が優位になったため、かえって職業をもった女性のほうが、肩の狭い思いするようになった。[4]

また、女性が主婦になれる経済的条件として、夫一人分の収入で一家の生計費がまかなえるようになる必要があるため、それぞれの社会、それぞれの階層で、この条件を満たす時間

2 具体的に言えば「全職太太」は裕福かつ有能で、本当は仕事のできる環境にあるが積極的に家庭に戻り、華麗な姿であまり家事をしない奥様のイメージが持たれているが、その一方で、「家庭婦女」は学歴が低く仕事ができないため、家事に専念せざるを得ない女性というイメージが与えられる。

3 ロパタの定義が主婦の生活状況を概観している。つまり、主婦は一般的に「家庭の主婦」と言われるように、家庭の枠組のなかの地位をさし、既婚女性がその地位を占める。しかし、女性解放の運動や研究が進められるなかで、主婦の分析的定義が注目されるようになった。例えば、日本の家制度における家長に対しての主婦とは異なり、西欧の主婦は産業革命を契機に家庭が生産から分離され、上質の労働力を再生産することに専心する役割が要請される過程で誕生した（目黒依子 1993）。

4 日本における主婦の誕生から主婦の大衆化については、落合（1994、43-48）を参照した。

差が存在している。家計のために働かざるを得ない女性にとって、労働市場から家に戻ることは、決して女性の社会地位の低下を意味するわけではなく、むしろ厳しい労働から解放され、社会地位が上昇することを意味する。ところが、1960-70年代より電化製品が普及し、大衆的なフェミニズム運動が隆盛し、女性が家庭外に自己実現を求めるようになったため、先進資本主義国では有配偶女性の急速な労働市場への参入という共通の現象が起こった。つまり、欧米の女性は、大まかには、男性と同等に労働している時期、労働市場から撤退して主婦になる時期（主婦化）、主婦をやめて社会に進出する時期（脱主婦化）という三段階を歩んできた。それに対して、中国の女性就業は，夫婦が共働きをしなければ生活できない経済的な圧力と、社会主義化が女性の労働力化を推進したことによるもので、「必ずしも主婦の消滅以後といえるようなものではなく、主婦の誕生以前といった要素をもはらんで」おり、「家父長制との妥協の中で数々の矛盾を抱えている」のである[5]。そのため、計画経済から市場経済に転換している現在の中国で出現しつつある主婦は、単に主婦の誕生以前、または脱主婦化以後の社会現象と考えるよりも、むしろその三段階の主婦の特徴が複雑に絡みあっているものと考えたほうが、より真実の主婦の姿に迫ることができるだろう。

そこで、本稿では、異なる階層の主婦という意味合いを持つ「全職太太」と「家庭婦女」の両方を研究対象にし、「無職で夫の経済力に依存し、主に家事労働に専念または家事の運営を管理している既婚女性」という両者の共通点に焦点をあて、転換期を迎えている中国で見られる主婦の現状について考察する。

2 「経済的な役割」と「良妻賢母の役割」に揺れる新中国の女性

T・パーソンズ（1955）はアメリカの核家族をモデルにし、男女で異なる生物学的な性別の特徴、核家族の孤立、および現代「社会で家族と職業体系との区別が明確になったため」、家族という小集団で「男性は道具的な役割、女性は表出的な役割」という性別役割に分化されていると指摘する。具体的に言えば、道具的な役割を担う父親は、対外的な関係をつかさどり、集団としての家族の目的を達成するが、表出的な役割を担う母親は、家族成員の情緒を安定化し、成員互いの連帯関係を維持して、子どもについて主な責任を負うのである。このように、パーソンズは「男は外、女は内」という性別役割を提示しており、女性の主な役割とは子どもをはじめ家族成員の世話をし、成員間の関係をしなやかに保ち、男性の道具的な役割を補佐することである。本稿では，上述のような女性の担う役割を「良妻賢母的役割」とし、社会に進出し家庭に一定の収入をおさめることを「経済的役割」として論述する。そして、この「経済的役割」と「良妻賢母的役割」という観点から、1949年以後の新中国女性の性別規範の変遷を見ることにする。

周知のように、新中国の女性は自らの女性解放運動によってではなく国家の直接的な関与を受けながら、都市から農村に至るまで「家庭の人」から「社会の人」へと脱皮していくプロセスをたどった（李小江 2000）。このプロセスを完成するために、男女平等を守る法律の

5 瀬地山角『東アジアの家父長制』勁草書房、1996、pp. 79-81.

確立、イデオロギーの浸透、政治運動と行政の関与のみならず、国家は女性の就職率の向上にも積極的に介入した。そのため，1950年代の都市女性をみると、主婦の比率は90%から10%に下がり、その代わりに就業する女性の比率は10%から80～90%に上がった（李銀河 2005）。このように、大躍進、[6] 文化大革命の時期から、農村でも都市でも、家事のみに専業する女性がほとんどいなくなり、その代わりに、多くの女性が家事以外の労働に従事する社会体制となった（譚深 1993）。

とくに、都市の共働き家庭にとって、一家の収入の半分は女性が支えている点からみると、女性は男性に経済的に依存するという従属的な性別規範の特徴を根本的に変えたと言える。それにより、新中国はまさに「女性は半分の天を支えている」というスローガンを実現した。しかしその反面、無職で家事に専業している女性が、「没素質，没覚悟」（一定の能力に欠け、政治的な自覚なし）とみなされることにもなった。男性と同じように社会に進出し、「経済的な役割」を担う女性が新中国の理想的な女性像だったのである。

では、1949年以後、社会主義中国の女性が短期間のうちに、しかも広範囲に、「家庭の人」から「社会の人」になったことによって、従属的な性別規範の秩序はいかなる影響を受けたのだろうか。

結論から言えば、実はそれほど影響が無かったのである。というのは、女性の社会への進出から生じた家庭内の性別規範への影響は、男女ともに国家に貢献するという共通の目標に裏打ちされているからである。左際平（2005）の言葉を借りれば、「国家単位制度[7]が都市部の男女市民の就業と生活に基本的な保障を提供する際に、男女ともに国家と相互的な権利・義務関係が発生した。この権利・義務関係から派生した特徴は、男女労働者が国家という『大家』のために、自分の家という『小家』を放棄することである」。さらに、女性が社会に進出しても大きな社会反響をもたらさない理由は、当時「高就業率、低収入」という就職制度を実施していたため、夫婦で共働きをしないと一家の生計が成り立たないという経済的な要因が大きく働いていたからである。

ところで、1980年代以降、つまり効率を優先する市場経済時代がやってくると、男女の「同工同酬」（同一の労働に対しては、同一の報酬を与える）は、労働に応じて配分する効率原則に反していると見られ、男女平等という社会公平の追求は次第に終息する。とりわけ、国

6 1958年から1960年までの「毛沢東思想」に基づく中国の急進的な社会主義建設の試みを指す。当時「15年でイギリスに追い付き追い越せ」という国家目標が提示されたように、「大いに意気込み、つねに高い目標を目ざし、より多く、より早く、より経済的に社会主義を建設する」という「社会主義建設の総路線」が精神的原則として提起され、1958年夏に出現した人民公社が農村における大躍進政策の実行単位として組織化された。この大躍進政策は熱狂的な大衆運動として展開され、短期間のうちに次々と生産目標が高められた。しかし農業生産力の客観的な限界を無視した政策の結果、中国農村は荒廃の極に達してしまい、失敗に終わった。

7 中国で、「単位」は一般的に都市部における社会成員が所属する組織形態（職場）を指しているが、1978年の改革開放以前、すべての資源は「単位」に独占されているために、「単位」と個人との関係は非常に緊密であり、人は生まれてから死ぬまで「単位」と関わっており、例えば，住宅の有無、大きさという日常的な生活まで「単位」と密接的な関係を持っている。さらに、制度上から言うと、「単位」から離れる人は社会的地位、一社会人として存在する基礎さえ失うことを意味し、国家にとってもその人をコントロールしにくくなるということをも意味したのである（李漢林 2004）。

家が単位制度を通して実施してきた医療、住宅、教育など一連の福祉政策は、重荷となり、すべて社会と個人に投げ出された。それ以降、女性は、就職難で失業しやすい状況に直面しなければならなくなっていく（方英 2008）。次第に、新中国が樹立した「経済的役割」を担う理想的な女性は、市場経済時代の中では、生きにくくなっていった。

こうした社会背景のもと、「婦女回家」（女性が社会から家庭に戻る）に関して、1980 年代初めから 2000 年までの間に 3 回にわたって、激しく議論されている。最初の議論では、主に女性が家庭に入り、良妻賢母の役割に専念すべきという意見と、経済的な自立がなければ社会地位が下がるため女性は仕事を持つべきであるという意見の二つに分かれていた。そして、就業の圧力を緩和させようとする国家労働部は、「婦女回家」の提案を中央政府への報告書にまで載せていた。しかし、この提案は，直ちに中国婦女連合会の抗議により取り下げられ、「婦女回家による就職圧力の解消は消極的な就業対策であり，それは社会に対する信頼を失う表現である」という当時の胡躍邦書記の指示で、公の議論も一旦沈静化した。ところが、その後、就業の圧力が強くなるたびに、「婦女回家」の議論が再燃する。国家サイドでは、一貫して「婦女回家」が就業問題の有効な対策ではないと強い姿勢を示しているが、計画経済時代に比べると国家が女性の就業を後押しする力は弱まる一方であるため、効率と利益を重視する企業サイドでは、積極的に女性を受け入れず、解雇の際は女性から解雇するという事実上の対策を採っている（蒋永平 2001）。女性サイドでは、積極的に「回家」を選択している者もいれば、失業により「回家」せざるを得ない者もいる。そして、きっかけは別として、中国都市部に主婦が増加している。

では、新中国の理想的な女性モデル（社会の人）が長年の教育やイデオロギーの浸透により中国社会に根ざしている社会背景がありながら、1980 年代以降は女性を「社会の人」から「家庭の人」に戻す流れが生まれたこと、すなわち「経済的役割」より「良妻賢母的役割」を強調する性別規範が復帰したことに対し、女性たちはどのように考えて対処しているだろうか。

2003 年の北京海淀区婦連の二千組の夫婦を対象とした調査によると、実際に専業主婦をしている者は全体の 4.5%にすぎないが（失業による主婦は含まれない）、専業主婦を希望している者（14.8%）と経済的な条件がよければ退職して主婦になる者（47.7%）をあわせると、62.5%に及ぶことが分かる。さらに、経済的に発展している広東省の女性の社会地位に関する 2000 年の調査によると、「もし配偶者、または家庭の経済状況がよければ、あなたは専業主婦になりたいですか」という問いに対して、24.9%の女性が，経済的に問題がなければ専業主婦になりたいと答えている。この数字は全国の平均レベルに比べて 13 ポイントも高い。また、2000 年の広東省の女性就業率が 1990 年に比べて約 10 ポイント下がったことは、実際に専業主婦を選択している広東省の女性が多いことを裏付けることになるだろう。

また、李明歓（2004）が行った女子大学生の性別規範に関する研究では、近年の主要な性別規範についての 10 の調査結果を通して、半数近くの大学生が「男主女従」（男性が主役で女性が脇役）という家庭構造を支持していること、経済発展地区ほど男尊女卑、従属的な性別規範意識が強いこと、卒業した女子大学生は在学中の女子大学生よりこうした性別規範

意識が強いという３点をあげて、高学歴と経済発展が女性の生活環境を改善しているが、こうした変化が望ましい性別観念の構築と必ずしも正相関しているとは言えないと指摘している。また、毛沢東時代の「男女都一様」（男女は全く同じだ）の性別観念から、近年になって「男女不一様」（男女は同じでない）という性別観念に変わり、女性の特有な気質を重視するようになっており、さらには新中国成立当初から否定されてきた男尊女卑、「男主女従」という考え方さえ主流社会に進出しつつあると分析されている。

上述のように国家サイドでは一貫して男女平等を主張しているが、民衆の間では、女性の従属的な性別規範が密かに広がり、良妻賢母の役割が女性の重要な役割となっているのであろう。

３　軽視・見落とされている新中国女性の役割：良妻賢母と女性内部の多様性

これまでの新中国女性に関する研究では、女性の就業率という観点から、女性が経済的な独立により男性と平等な社会地位を獲得したと論じる研究がある一方、家庭内の決定権、家事分担などから女性が実質的な平等を得ていないと指摘する研究もある。つまり、新中国政府が提唱している「社会の人」という公的領域の女性像と、家で求められている「家庭の人」という私的領域の女性像の間には，矛盾する点が存在している。しかし、なぜこうした矛盾が存在し、この矛盾がどういう様子で出現しているかについては、これまでの研究では、ほとんど言及されていない。

新中国政府が男女平等を実現するために、短期間、広範囲で女性に就業機会を与えたにもかかわらず、家庭内の役割分担に関してはそれほど強く再編が迫られず、それぞれの家族の自治に任されてきた。その結果、女性は仕事と家事という二重負担に苦しみ、「経済的役割」と「良妻賢母的役割」の遂行に矛盾が生じる場合も出てくる。

具体的に言うと、新中国女性にとって、社会に進出し収入を得て経済的役割を担うことは、新たな役割というだけではなく、社会においても、家庭においても、最も評価され、最も称賛される役割となっている。その一方で、女性がずっと担ってきた育児や家事労働は、依然として女性の負うべき義務と見なされながらも、経済的役割より下位に置かれ、それ相応の評価がされていないのである。その原因は、新中国政府の描いた理想的な女性像にある。つまり、女性は男性と同じように職業を持ち、経済的な地位を獲得することでこそ、人格的な独立を得られるのであり、良妻賢母のような女性は保守的で、遅れていると見なされたのである。

さらに重要視されていないことは、新中国女性の多様性である。王天夫等（2008）が都市性別収入の差異に関する研究において指摘しているように、中国では国家平等主義の政策を実施してきたが、異なる階層の女性にとってその効果は異なる。この観点に従って述べると、それぞれの階層で女性は「経済的役割」や「良妻賢母的役割」の認識から遂行まで差異が生じるだろう。しかし、これまでの男女平等に関する研究では、こうした女性内部の差異がしばしば見落とされてきたため、異なる階層の女性による性別規範の違いに関する検討が十分

にされておらず、女性の間に存在している差異は男女の性別差異として集約されている。

Ⅲ　調査の概要

2007年8月から2008年1月にかけて、中国の哈爾濱市、南京市、スワ頭市の主婦を対象にインタビュー調査を行った。各都市の主婦または家族全員に1時間から2時間程度、半構造化インタビュー調査を行った。調査対象は哈爾濱市17名、南京市9名、スワ頭市5名、計31名の専業主婦である（表1の通り）。

主要な項目として、①夫婦の結婚年数、子ども数、家族構成、②全世帯の収入、夫の職業と収入、夫婦両方の学歴、③主婦になるきっかけ、主婦になったことに対する周囲の態度、④女性の経済的な役割と良妻賢母の役割に対する考え、⑤家事・育児に関する考えと実際のやり方、⑥自分の子どもが結婚後，主婦になること、またはその妻が主婦になることに対する態度などの項目を設定し、インタビュー調査を行った。

この三つの都市を選んだ理由は以下の通りである。①哈爾濱市は中国東北地区の黒龍江省に位置し、かつては旧東北工業基地として大規模な工場と大量の工場労働者を有していた。しかし、計画経済時代の単位制度の改革と経済発展の立ち遅れにより多くの失業者を生み出したため、家庭に入らざるを得なくなった女性労働者が多い。また哈爾濱市では「男主女従」（男性が主役で女性が脇役）の家庭構造が多く見られるが、「男は外，女は内」という役割分担を支える経済的な条件がまだ揃っていないため、共働きの夫婦が基本である。②南京市は江蘇省の省政府所在地であり、揚子江に隣接し、商業都市である上海に近いこともあり、流通の中心となっており、重要な総合工業生産基地でもある。近年南京に移入する労働人口が増加傾向を示しているため、夫の転勤で主婦になる女性が増えている。③スワ頭市は広東省の東南部に位置し、香港に近い。中国の最初の経済開発区の一つで、一人あたりの収入レベルが全国でもトップレベルに位置する一方、従属的な性別規範意識が強く、1980年代から主婦が増加傾向にある。

また、より効果的に分析するために、主婦になるきっかけを、自分の意志による積極型（能動型）と国家の「改制」と失業による消極型（受動型）[8]に分類し、また中国国家統計局の都市部家庭収支状況に関するデータを参考にして、被調査対象の家庭の経済状況を上・中・下に分類している。[9]

なお、この調査では、主婦になる女性の性別規範に対する解釈を中心としたために、就業

8　主婦になるきっかけについて、潘允康（2004）は「幼児の世話；夫の仕事又は事業；本人の失業」という三つの受動的な原因によるものと指摘するが、本稿では、「本人の失業」によるものを消極型（受動型）にし、「幼児の世話；夫の仕事又は事業」によるものを積極型（能動型）にする。

9　中国国家統計局の都市部家庭収支状況（2008年の第1四半期）によると、全国一人当たりの1～3月の総収入は4674元（そのうち、黒龍江：3041元；江蘇省：5899元；広東省：6196元）である。つまり全国の平均月収は約1500元である。上述の数字を基準に、本稿では、夫の月収が全国平均レベルより低い家庭を低収入家庭（1500元以下）、全国平均レベルより2～5倍の家庭を中流家庭（3000元から7500元）、全国平均レベルより5倍以上の家庭を高収入家庭（7500元以上）とする。

中の女性と比較することができないという限界がある。また、調査の内容からインタビュー数が限られている。したがって、厳密に言えば、本調査は、主婦研究における一つの問題提起の域を出ないことをことわっておきたい。

Ⅳ　分析

1　経済的条件と学歴（技術）が受動型主婦の選択と周囲の態度を左右する

周囲の羨望を集めるB（1980年生まれ）は、かつて中国大手電通会社に勤めていたが、体制改革と結婚を機に仕事を辞め、2、3年間主婦になった後、現在は仕事に復帰している（本人は「経済的な理由で再び仕事をするのではない」と何度も強調した）。「今でも私は、半分養ってもらわないといけない『全職太太』ですよ。現在の月給（月4、5千元）では私の小遣いが足りないからね」と言う。そして、「夫に経済的に頼ると自分の地位が下がると感じますか」という質問に対して、Bは「全然感じていないです。私は妻で、男が妻を養うのは当然のことですよね」と答え、「男女の平等は給料で決められないもので、『全職太太』になった時でも、夫から見下されたことがないし、自分も卑屈に感じたことはありません。本当の平等とは精神的な平等だと思いますよ」と述べる。

A（1972年生まれ）はかつて哈爾濱市で最も歴史の長い百貨店で会計の仕事をしていたが、体制改革をきっかけに退職し、DINKSの考えをやめて子作りに専念し、インタビュー時、妊娠2ヶ月であった。体制改革のために退職したAは、「私の専門は会計ですから，仕事を探しやすいですよ」と，自分が仕事を見つけようとすればすぐに見つけられることをアピールした。またAは、「最初，友人は私が主婦になることを不思議に思っていたが、今は、みな私が良い夫をもって羨ましいと言っている」と述べ、「今は私が夫の健康，飲食の面倒をみて、子どもが生まれてからは，育児に専念する」と自分の良妻賢母ぶりを語った。

上述のように、体制改革のために失業し、やむをえず主婦になった「受動型」であるにもかかわらず、夫の高収入が背景にあるBとAは、周囲の羨望の対象となり、先進的かつモダンな存在となっている。また、高収入の経済的状況と高学歴により、BとAは家庭の主婦と職業女性を自由に転換できるという余裕がある。ところが、興味深いことに、BとAは従属的な性別規範を支持しながら、二人とも自分は仕事ができることと、お金のために仕事をするのではないことを強調している。このことから、新中国女性の性別役割の最も特徴的な点、即ち経済的役割が良妻賢母的役割より優越していることが、高収入で高学歴の主婦、BとAの語りからも表れている。一方で、二人とも金銭的に困ることのない中国社会に現れ始めた裕福な「全職太太」であることをもアピールしたいようである。

1996年に夫と共に失業したC（1965年生まれ）は、「全職太太」という呼び方に非常に恐縮した態度で「私は『太太』ではない。ただの家庭の主婦だ」と強調した。Cは、失業してから半年くらいの間，専業主婦をし、その後、街で果物売りの行商をし始めて10年が経つ。一緒にインタビューを受けた冗談好きなCの夫は「実は二人は、とっくに離婚していて、彼

女と息子が僕の所に居候しているんだよ」と語ったが、それは冗談ではなく、本当のことであった。離婚（実は偽装離婚）したのは、二つの家庭として社会保険金を二倍受け取るためである。

体制改革で失業したCは、専業主婦になって半年も経たないうちに、すぐ果物売りになって街で行商を始め、一日12、13時間、労働している。Cが仕事に復帰したのは、Bのように自分の意志というより、むしろ経済的困難によりそうせざるを得なかったからだと言えよう。さらに、社会保険金を多く貰うために、偽装離婚までしたことから、実際の生活状況により、Cは良妻賢母的役割と経済的役割のどちらを優先するかを選択する余裕は持てず、必然的に経済的役割を担わなければならなかったのであろう。

1993年に1万元の退職補償金を受け取り家庭に入ったD（1953年生まれ）は、当時30代であった。当時の感情を「実は家庭に入りたくなかったの。でも体制が変わったから仕方がない。中国の女性はやはり仕事をしたい」と仕事を続けたかったことを述べる。再就職について、Dは「年齢も年齢で、技術を持っていないし、月1000元未満の仕事は肉体労働ばかりでちゃんとした仕事がない」と、40代の再就職の難しさを語りながらも、現在の生活に満足し、「この家は、私を必要としているから」と述べた。そして本人は、早めに退職したという意識が強く、失業により主婦になったという認識は薄いようである。

G（1953年生まれ）は哈爾濱市の大型工場に勤めていたが、90年代後半の体制改革により夫と共に失業した。「家庭に入ってから虚しい気持ちがもちろんあった。夫は、もっとそうだった。男は家族を養う責任があるから」と述べた。その後、約1年間、専業主婦をしていたが、美容師の技術を持っていたため、住宅を改造して美容室にして兼業主婦になり、「工場に勤めていた頃よりずっと収入が良くなって、友達は私を羨ましく思っている」と、Gは述べた。

DとGは中卒で「下郷青年」（文化大革命時に、毛沢東の呼びかけで農村に行った都市の青少年）だったが、Dが再就職しなかったのに対して、Gは美容師の技術を持っていたため、主婦になって一年後に仕事を再開し、しかも収入は前の倍になった。このように、中レベルの経済状況に属している二人は、異なる選択をした。再就職できたGは前より稼げたため、周囲の羨望の的となり、Dは良妻賢母型役割に専念して、「家は私を必要としている」と自分の新しい役割について積極的に解釈している。

2　能動型の主婦：良妻賢母的役割への強い責任感と職業をもつ女性への憧憬

仕事に打ち込んで財務主任にまで昇進したI（1970年生まれ）は、主婦になる前に子どもの面倒をほとんど見なかったが、娘のひどい学業成績を見て「夫と相談して、どれだけ稼いでも子どもの教育がちゃんとできなかったら何もならないからと、2006年に私は正式に財務主任の仕事を辞めました」と述べた。「仕事を辞めてから、子どもの通っている塾もすべて辞めさせ、私と夫が娘の勉強の計画を立て、二人が勉強しながら彼女を教え始めました。そして、できるだけ外食をやめて私は自ら娘の好きな食べ物を作っています。……子どもが順

調に成長できるかどうかは70%くらい母親が子供に正しい生活習慣を身につけさせたかどうかに左右されると思います。……今、娘は、69中学校（哈爾濱市の名門中学校）の中間テストにおいて3位になった」とIは非常に誇らしげに語った。

子どもの誕生を期にJ（1970年生まれ）は主婦になって5年が経つが、「私は，とても外で仕事がしたい。本当は,『全職太太』でありたくない。でも,子どもが通っている塾が多くて、家にいないときちんと面倒が見られないし……。家族の面倒をよく見たいけれど、自分の世界も持ちたい」と矛盾する気持ちを語った。

同じく子どもの誕生をきっかけに、K（1974年生まれ）は電車車掌の仕事を辞めて、専業主婦になったが、「5年間の主婦生活は本当に楽しくなかった。子どもの面倒をよく見ていたと思いますが、社会から取り残されたような気がします。とくに、主婦になってから夫との関係が悪くなって、互いに理解できなくなったのです。……夫は私が社会に復帰することに賛成しなかったが、何度も話し合って、再び仕事を始めることができた」と、やっと仕事に復帰できたことを嬉しそうに語った。

上述の3名の哈爾濱市の能動型主婦は、育児や子どもの教育のために仕事を辞めて、良妻賢母的役割に強い責任感を示している。しかし注目に値するのは、JとKが仕事に復帰したい気持ちを何度も強調していることから、彼女たちは自分の価値や生活の意義を解釈する際、やはり良妻賢母的役割より、経済的役割を高い位置に置いていると言えよう。また、Iは、JとKのように直接的な表現で再就職したいとは言っていないが、「子どもの教育のために財務主任の仕事を辞めた」という言葉から、社会通念において経済的役割が良妻賢母的役割より高い位置にあるにもかかわらず、あえて子どもの教育のために仕事を辞めたと言うことで、良き母親としての自己肯定をしていると考えられるだろう。

家庭の年収が20万元以上あると語るウ（1968年生まれ）は、主婦になった理由について、「私は、基本的に家にいるのが好きだ」と言いながらも、「必要であれば、私はすぐお金になる仕事を見つけられるよ。私には最低限、そのくらいの能力がある」と述べ、「今は約80%の時間が子どもの教育に占められているけど、それだけでも毎日忙しい……。仕事をするのはお金のためではない時にこそ、人生の面白さが出てくると思う。『全職太太』『全職ママ』も一つの仕事としてこなすことができる」と現在の主婦生活について語った。

主婦になって15年のカ（1976年生まれ）は、自分の生活について「私は高い志を持っていない女性で、18歳の時に夫と恋愛して以来仕事を辞め、今、娘は10歳になります。本当に無駄な一生を送っていると思います……。時々、ずっと家にいるのがつまらなくなるけれど、子どもの教育に専念して、子どもが少し大きくなったら海外に移住するつもりです。私は、綺麗でもないし、背も高くないし、勉強もそんなにできないし。こんな私に優しくしてくれる夫に会えたから、今の生活ができて満足しています」と語った。

国営企業に勤めていたオ（1969年生まれ）は、「4、5年間、専業主婦になったが、自らなろうとしたというよりは、今の社会では、子どもを産むことイコール失業だから、私たちのいる国営企業も同じ。でも家にいると自分の存在価値がなくなり、やはり経済的に独立しな

いと立場も弱くなるような気がする。だけど、いくら探してもいい仕事が見つからない」と、社会に復帰したいが、なかなかできないという焦る気持ちを語った。

以上３名の南京市の能動型主婦の場合、カとオはそれぞれ「仕事をしなかった自分の人生は無駄な人生だ」、「経済的に独立しないと立場が弱くなる」と表現し、主婦になっている自分を低く評価している。一方、ウは「『全職太太』『全職ママ』も一つの仕事としてこなすことができる」、「仕事するのはお金のためではない時こそ生活に面白さが出てくる」と話し、主婦になっている自分の役割を積極的に解釈しながらも、「必要であれば、私はすぐお金になる仕事を見つけられる」と話し、自分が経済的な役割を担う能力を備えた人間であることをアピールしている。

スワ頭市のス（1964年生まれ）は、二番目の子どもを産むことで（中国の計画生育政策に反していたため、子どもを産むか仕事を続けるかという「選択」を迫られた）、仕事を辞めて主婦になった。スは夫の両親、祖母と同居しており、家政婦を雇わず、４世代７人家族の世話をしている。主婦生活はつまらないかという質問に対し、「そんなことはないですよ。周りの皆もそう（主婦）しているし、子どももまだ小さいし、義理の両親の面倒もあるし、毎日けっこう忙しいですよ」と微笑んで答えた。インタビューが終わると、スは急いで中学生の娘の寄宿舎に食べ物と服などを届けに行った。

サ（1965年生まれ）は、「二番目の子どもを産むために、私も夫も勤めていた国営企業を辞めた。……代償は大きかったが、後悔はしていない。実は姉二人も二番目の子を産むために仕事を辞めた」と述べ、「毎日子どもの送り迎えや、子どもの健康のため栄養のあるものを作ったりしてけっこう忙しい。……ちょっとした小さな商売をしようかと思ったことがあったけれど、夫は、子どもの小さい時は（女性が）家にいた方がよいと賛成してくれなかった」と語った。

結婚をきっかけにコ（1973年生まれ）は、月４千元の仕事を辞めて主婦になったが、「一時、夫の経営していた会社が危なくなって……専業主婦を辞めて私も仕事に復帰しようと思いました。……夫は私が仕事することにずっと反対です。かなりの亭主関白で、女は家で子どもと家をきちんと管理できればそれでいいといつも言います。……私は仕事がしたいですが。でも、南方では皆そう（女性が主婦になること）だから」と語る。

以上、スワ頭市の３名の主婦の中では、スが最も積極的に良妻賢母的役割に専念している。サとコは仕事をしたい気持ちを述べているが、夫の反対にあったり、周りの女性たちがみな専業主婦をやっていることから、良妻賢母的役割を従順に担っているように見える。特に注目に値するのは、周りの女性たちがみな専業主婦になっていることをスワ頭市の主婦たちが何度も強調していることである。その点は、他の２都市の主婦の語りにはみられなかった。これは1970年代末から1980年代初頭にかけて、スワ頭市が計画経済の軌道から外れていたために、国家が単位制度を通して、効果的に男女平等の就職制度を貫ぬきにくくなったことと関連している。その他の要因として、夫一人の給料で一家を養える家庭が他の都市より多いため、「男は外、女は内」という従属的な性別規範も広がりやすいと考えられる。

Ⅴ　結論

分析の結果、まず、Ⅳ－１とⅣ－２で見たように、受動型主婦にしても、能動型主婦にしても、自分の価値を評価する際に日常的に担っている良妻賢母的役割を、経済的役割より低い位置に置いている傾向が見られる。これは新中国理想の女性が、「社会の人」としての部分を最も評価されるのに対し、良妻賢母の女性は保守的で、遅れた女性としてみなされることに関わっている。

次に、経済的役割を遂行するのが理想的な女性だが現実にはできないという矛盾は、受動型主婦の間に特に顕著に見られる（D、G、C、A）。この矛盾は国家サイドが「女性の自立は経済的な自立から」という男女平等の理念を一貫して掲げているにもかかわらず、市場経済により効率を重視する企業が女性に就業機会を積極的に与えないことで、生じたものであろう。また、ほとんどの調査対象者は経済的役割と良妻賢母的役割の間を行き来し、どちらを優先すべきかの葛藤を抱えている。その原因として、公領域と私領域では、女性に期待される「経済的役割」と「良妻賢母的役割」を遂行する優先順位が異なるからであると考えられる。新中国政府は男女平等を実現するために、女性に男性と同等の就業機会を与えると同時に、男性と同様の仕事ぶりも期待し、特に効率を優先する市場経済時代ではなおさらである。しかし、家庭内の役割分担については男女平等の性別規範が再編されず、依然として良妻賢母的役割が女性の第一要務として期待されている。こうして、女性には仕事と家庭の二重の負担がかかっているだけでなく、公領域と私領域の間で二つの役割のどちらを優先するかという選択を常に迫られている。

以上の知見は人々にとって新しく出現し始めた中国の主婦、及び一般的な中国女性の性別規範を分析するのに貴重な成果と言えよう。

ただし、Ⅳ－１とⅣ－２で論じたように、家庭の経済条件、学歴と都市の違いが主婦の性別規範の解釈に異なる影響を与えている。具体的な違いは、①高収入家庭・高学歴の主婦は受動型、能動型の両方が性別役割について解釈する際に、経済的役割を良妻賢母的役割の上におく傾向を示している。その一方、彼女らは裕福な家庭を持っているからこそ、「全職太太」になることが先進的、モダンなものとして周囲の羨望を集める。つまり、主婦になることは必ずしも経済的な自立を失い社会地位が低下することを意味するわけではない。また、家計のために再就職したいのではないことを強調している彼女らは、ほとんどが経済的役割を担う能力があることをアピールしている（A、B、K、N）。②中収入家庭の受動型と能動型の主婦は、職業と家庭の両立ができる女性に憧憬を抱いているものの、「経済的役割」を担えない場合、積極的に良妻賢母的役割を担うことを通して自分の新しい役割を解釈しているように見られる（D、P、H、I、シ）。ただし、夫の収入が少ないほど再就職の傾向が強く見られる（G、ク、コ）。③低収入家庭の受動型主婦には、経済的役割と良妻賢母的役割でもって自分の性別規範を解釈することにより、自分が重要な働き手として経済的役割を担わなけれ

ばならないという現実がある。④都市別で性別規範に対する考えをみると、スワ頭市と哈爾濱市の主婦に顕著な違いが見られ、中国経済発展の前線にあるスワ頭市の主婦は、「男は外、女は内」、「男主女従」の従属的な性別規範に同調しているのに対して、経済発展の遅れている地域である哈爾濱市の主婦は新中国の樹立した理想の女性に憧憬を抱き、良妻賢母的役割より経済的役割を担うことに最も価値を置いているように見える。スワ頭市の主婦は、一人っ子政策に反してまで仕事を辞め、二人目の子どもを産むことから，良妻賢母の役割を従順に担うのみならず、それを最も価値のあるものとして認識しているようにも見える。

以上のように、中国市場経済の進展により出現し始めた主婦は多様性に富んでおり、この多様性は家庭の収入、学歴、都市の違いによるものであることが明らかになった。しかしそれだけではない。その多様性をもたらすもう一つの要因は、中国の主婦が欧米や日本のように上流から中流の家庭に大衆化していく道を歩んでおらず、革命の勝利と共に女性も社会に進出したという独特な解放の道を歩んできたからと考えられる。本稿では、それについては深く掘り下げていないが、今後の研究の課題としたい。

参考文献

蒋永萍（2001）
「世纪之交关于“阶段就业”、“妇女回家”的大讨论」『妇女研究论丛』02：23-28.
臧健（1994）
「妇女职业角色冲突的历史回顾－关于“妇女回家”的三次论争」『北京党史』02：33-38.
孟迎芳（2001）
「想说回家不容易“妇女回家”现实吗？」『福建省社会主义学院学报』(03)45-49.
梁理文（2003）
「市场经济条件下妇女的角色选择关于“妇女回家”现象的思考」『广东社会科学』(03)45-49.
代堂平（2005）
「社会性别视角下的“让妇女回家”」『长白学刊』04：79-81.
赵美玉（2004）
「抗战前“妇女回家”论兴起的原因」『哈尔滨学院学报』02：19-21.
那　瑛（2008）
「“离家”与“回家”」中国博士学位论文全文数据库 .
丁琳琳・冯云（2005）
「现代全职太太的经济学分析」『边疆经济与文化』11：39-41.
方　英（2008）
「市场转型与中国城市性别秩序分化」『江西社会科学』01：193-9-197.
———（2009）
「“全职太太”与中国城市性别秩序的变化」『浙江学刊』01：211-218.
白　玲（2004）

「中国式全职太太的心理魔障」『中国新闻周刊』37：46-48.
王青富（2002）
「都市女人、你想做“全职太太”吗」『现代交际』06：86-88.
王天夫・賴揚恩・李博柏（2008）
「城市性别收入差異及其演変：1995-2003」『社会学研究』02：23-53。
王　政（2003）
「浅议社会性别学在中国的发展，妇女与社会性别研究在中国」天津人民出版社.
李明欢（2004）
「干得好不如嫁得好－关于当代女子大学生性别观的若干思考」『妇女研究论丛』04:25-30。
李小江（1995）
「“男女平等”：在中国社会实践中的失与得」『社会学研究』01：54-68.
———（2000）
「中国婦女走到了哪裏？」『亜州婦女研究』第１期（参照したのは、李小江『女性／性别的学術問題』山東人民出版社、2005：140-161）.
李銀河（2005）
『性别問題』青島出版社.
李漢林（2004）
『中国単位社会―議論、思考と研究』上海人民出版社.
左际平（2005）
「20 世纪 50 年代的妇女解放和男女义务平等：中国城市夫妻的经历与感受」『社会』01：78-88.
林松乐（1993）
「1981-1992 年中国职业女性角色冲突观点综述」『南方人口』06：118-192.
小山静子（1991）
『良妻賢母という規範』勁草書房.
落合恵美子（1989）
『近代家族とフェミニズム』勁草書房.
————（1994）
『21 世紀家族へ』有斐閣.
————（2000）
『近代家族の曲がり角』角川書店.
————・山根真理・宮坂靖子（2007）
『アジアの家族とジェンダー』勁草書房.
瀬地山角（1996）
『東アジアの家父長制―ジェンダーの比較社会学』勁草書房.
潘允康（1989）
『在亜社会会中沈思』中国婦人出版社（=1994、園田茂人監訳『変貌する中国の家族』岩波書店）.
Parsons, Talcott and Robert F. Bales（1955）
Family: Socialization and Interaction Process, Free Press.
W. L. Parish & S. Busse（2000）

"Gender and Work." In *Chinese Urban Life under Reform: The Changing Social Contract*, (eds.) by W. Tang & Tang & W. L. Parish. Cambridge Modern China Series. MA, Cambridge: Cambridge University Press.

Tang, W. & W. L. Parish（2000）

Chinese Urban Life under Reform: The Changing Social Contract. Cambridge Modern China Series. MA, Cambridge: Cambridge University Press.

譚深（1993）

「社会転型与中国婦女就業」『中国婦女与発展—地位、健康、就業』河南人民出版社.

表 1　調査対象者の基礎情報

調査地	調査対象者と生年	きっかけ（主婦の類型）と訪問時の就業状況		夫の収入と収入類型		学歴	家族構成
哈爾濱市	A（1972 年）	体制改革	受動型	月 3-4 万位	高収入	大卒	夫婦 2 人
	B（1980 年）	体制改革	受動型　就業中	月 2 万位	高収入	大卒	夫婦 2 人
	C（1965 年）	体制改革	受動型　就業中	月 1 千位	低収入	中卒	直系 5 人
	D（1953 年）	体制改革	受動型	月 4 千位	中収入	中卒	核家族 3 人
	E（1967 年）	体制改革	受動型	月 3 千位	中収入	高卒	核家族 3 人
	F（1958 年）	体制改革	受動型	月 5 千位	中収入	中卒	核家族 3 人
	G（1953 年）	体制改革	受動型　兼業	月 2 千位	中収入	中卒	核家族 3 人
	H（1960 年）	体制改革	受動型	月 4 千位	中収入	中卒	核家族 3 人
	I（1970 年）	子どもの教育	能動型	月 4 千位	中収入	大卒	核家族 3 人
	J（1970 年）	育児と夫の転勤	能動型	月 1 万位	高収入	大卒	核家族 3 人
	K（1974 年）	生育	能動型　就業中	月 1.5 万位	高収入	短大	核家族 3 人
	L（1972 年）	ずっと無職	能動型	月 1-2 千位	低収入	小学校	夫婦 2 人
	M（1985 年）	ずっと無職	能動型	月 1-2 千位	低収入	中卒	核家族 3 人
	N（1976 年）	会社運営の問題で辞職	能動型	月 1 万位	高収入	短大卒	夫婦 2 人
	O（1976 年）	生育	能動型	月 2 万位	高収入	大卒	核家族 3 人
	P（1971 年）	生育	能動型	月 4 千位	中収入	短大卒	核家族 3 人
	Q（1975 年）	生育	能動型	月 3-4 千位	中収入	高卒	核家族 3 人
南京市	ア（1978 年）	生育	能動型　就業中	月 8 千位	高収入	大卒	核家族 3 人
	イ（1973 年）	夫の転勤	能動型	月 8 千位	高収入	大卒	夫婦 2 人
	ウ（1968 年）	自ら辞職	能動型	月 1.5 万位	高収入	大卒	核家族 3 人
	エ（1970 年）	仕事の圧力で辞職	能動型	月 2 万位	高収入	大卒	核家族 3 人
	オ（1969 年）	生育	能動型　就職中	月 5 千位	中収入	大卒	夫婦 2 人
	カ（1976 年）	結婚	能動型	月 1.5 万位	高収入	中卒	核家族 3 人
	キ（1976 年）	生育の準備で	能動型	月 1.5 万位	高収入	大卒	夫婦 2 人
	ク（1970 年）	子どもの教育	能動型	月 4 千位	中収入	高卒	核家族 3 人
	ケ（1978 年）	夫の仕事で	能動型	月 6 千位	中収入	大卒	夫婦 2 人
スワ頭市	コ（1973 年）	結婚	能動型	月 5 千位	中収入	高卒	直系 6 人
	サ（1965 年）	第二子出産	能動型	月 8 千位	高収入	中卒	核家族 4 人
	シ（1961 年）	第二子出産	能動型	月 5 千位	中収入	中卒	核家族 4 人
	ス（1964 年）	第二子出産	能動型	月 2 万位	高収入	高卒	四世代 7 人
	セ（1973 年）	結婚	能動型	月 1 万位	高収入	高卒	直系 5 人